

ウォルター・アイザックソン著「スティーブ・ジョブズ」第1巻、講談社、2011年10月24日刊を読む

第1章<子ども時代>

- ・「スティーブ、ここがおまへの作業台だよ」と言いながら、父親は、ガレージにあったテーブルの一部に印をつけてくれた。
- ・「戸棚や柵を作るときには、見えない裏側までしっかりと作らなければならない」と教えられた。
- ・「きちんとするのが大好きな人だった。見えない部品にさえ、ちゃんと気を配っていたんだ」(P33)
- ・「親父は交渉上手だった。その部品がいくらするものなのか、売り手よりもよく知っていたからね」(P34)
- ・「アイクラーはすごい。彼の家は、おしゃれで安く、よくできている。こぎれいなデザインとシンプルなセンスを低所得の人々にもたらした」
- ・子どもの頃、アイクラー・ホームズをすごいと思ったからこそ、くっきりとしたデザインを持つ量販品の提供に情熱を燃やすようになった。
- ・「素晴らしいデザインとシンプルな機能を高価ではない製品で実現できたらいいなと思ってきた。それこそ、アップルがスタートした時のビジョンだ。それこそ、初代マックで実現しようとしたことだ。それこそ、iPod で実現したことなんだ」(P35)
- ・「こういうものが欲しい。それを、膨張率がどこも等しくなるようにひとかたまりの金属から作ってもらいたいなどと頼まれ、実際にどう作るかはオヤジが自分で考えなければならなかったんだ」
- ・部品もほとんどすべて、一から作る必要があった。つまり、加工に使う工具や金型から自分で作る必要があった。(P46)

第2章<おかしな二人>

- ・ブルーボックスがなければアップルもなかったと思う。それは間違いない。この経験からウォズも僕も協力することを学んだし、技術的な問題を解決し、製品化できるという自信を得たんだ。実際、二人は小さな回路基板を作り、何十億ドルもの費用をかけて作られたインフラストラクチャーを自由自在に動かしたのだ。
- ・ウォズはお人よしの魔法使いだ。かっこいいものを発明し、その成果は気軽に他人に渡してしまう。ジョブズはそれをユーザーフレンドリーにする、パッケージにまとめる、マーケティングをする、そして、利益を上げる方法を思いつくのである。(P67)

第3章<ドロップアウト>

- ・忍耐力という言葉はジョブズの辞書にはなかった。(P70)
- ・ぎりぎりまでそぎ落としてミニマリスト的な美を追求するのも、厳しく絞り込んでゆく集中力も、皆、禅から来るものなのです。(P74)

- ・彼はいつもはだしだった。印象的だったのはその激しさだ。何かに興味を持つとありえないレベルまで追求することが多かった。(P77)
- ・彼の得意技に、話し相手を見つめるというのがあった。相手の目をじっと見つめながら話し、目をそらさせない。そうやって、自分が欲しい反応を手に入れるんだ。
- ・現実歪曲フィールド (P78)
- ・「カリグラフィー」
- ・「セリフやサンセリフといった書体についても学びましたし、隣合う文字の組み合わせに応じて間隔を微調整するなど、すごい印刷技術がなぜすごいのかも学びました。美しいし、歴史的な意味もあるし、科学がとらえられない微妙な芸術的感覚もあると感じ、夢中になりました。
- ・ジョブズは、アートとテクノロジーの交差点に立とうとしていた。彼が作る作品は、いずれも、素晴らしいデザインや外観、フィーリング、エレガンス、人間らしさ、場合によってはロマンスとテクノロジーが一体となっている。
- ・いつも彼は、ユーザーにやさしいグラフィカルユーザーインターフェイス(GUI, アイコンやマウスを利用し、直感的な操作を可能にする情報技術)を大事にするが、その象徴ともいべきものがカリグラフィーのコースなのだ。(P82)

第4章<アタリとインド>

- ・アシュラム、ヒンズー教の修行所。(P91)
- ・僕は、西洋世界と合理的思考の親和性、西洋世界のおかしなところも見えるようになった。
- ・じっと座って観察する。じっくりと時間をかければ落ち着かせ、とらえにくいものの声が聞けるようになる。この時直感が花開く。ものごとがクリアーに見え、現状が把握できるんだ。ゆったりした心で、この瞬間が隅々まで知覚できるようになる。今までに得なかったものがたくさん見えるようになる。これが修養であり、そのためには修業が必要だ。あの時から僕は禅に大きな影響を受けるようになった。
- ・「禅へのいざない」を書いた鈴木俊隆老師。ロスアルト近郊。ジョブズはここで熱心に禅を学んだ。(95)
- ・憑(つ)かれたように進む姿勢
- ・うんざりすることもあります。でも、たしかに仕事は進むのです。(P103)

第5章<アップル1>

- ・アップルの製品には、必要な部品が全て組み込まれている。(P118)

第6章<アップル2>

- ・すべてが用意されパッケージとなった初めてのコンピューターを作ろうと思った。すぐ使えるマシーンを。(P126)
- ・すべてがコンパクトにまとまった一般消費者向けの製品とする。
- ・もっとシンプルにエレガントでなければならない。

- ・明るい色のプラスチックを成形した、流麗なケースがいい。(P129)
- ・完璧を求めるなら見えない部品もきれいに仕上げなければならない。
- ・情熱をもって完璧を追い求めた結果、ジョブズは本能的にすべてをコントロールしようとした。
(P131)
- ・金儲けを目的に会社を興してはならない。真に目標とすべきは自分が信じる何かを生み出すこと、長続きする会社を作ることだ。
- ・アップルは、他の企業より顧客のニーズを深く理解する、顧客の想いに寄り添う。
- ・やると決めたことを上手に行うためには、重要度の低い物事は全て切らなければならない。
- ・＜印象＞会社や製品が発するさまざまな信号がその評価を形作る。
- ・iPhone や iPad の箱を開けた時に感じるなにか、それがその製品に対する想いを決める第一歩になってほしい。(P137)
- ・洗練を突き詰めると簡潔になる。
- ・我々はすごいマシンを持つすごい会社なんだって世界に知らせなきゃいけない。
- ・新製品の発表を中心に、強烈な「印象」を与えて自分たちのすごさを人々に刷り込むのが重要だ。
(P140)
- ・この努力は報われる。ベージュ色の優美なケースに入ったアップル2は、しっかりしていながらフレンドリーな雰囲気を醸し出していた。(P141)
- ・とにかく、製品に対する情熱、完璧な製品に仕上げる情熱が半端じゃありません。
- ・アップル2のケースも問題になった。アップルがプラスチックの色を発注していたバンドン社には、ベージュだけで2000種類もの色が用意されていた。
- ・ジョブズはケースの角の丸みだけでも何日も費やしたらしい。(P145)

第7章、＜クリアランスとリサ＞

- ・徹底的に吟味しないと家具などが買えない性格。(156)

第8章＜ゼロックスとリサ＞

- ・自分のマシンが必要だ。さらには、「宇宙に衝撃を与える」ほどの製品が欲しかった。
- ・工業デザインに対するあくなき情熱をもって臨んだジョブズは、ケースの形状と大きさを先に決めてしまい、開発で搭載部品が増えても変更を許さなかった。(P157)
- ・ぼくらはここで未来を作っているんだ。波の先端でサーフィンをするのはすごく気持ちがいいだろう。でも、波の後ろを犬かきでついていくのはあまり面白くはないはずだ。僕らと一緒に宇宙に衝撃を与えてみないかい。
- ・真にクールな製品を作りたい。(P159)
- ・ジョブズは、この技術をゼロックスが商業化していないことが信じられなかった。「これは宝の山だよ。それを活用しないなんて、ゼロックスはどういうところなんだ」(P164)
- ・人類が成し遂げてきた最高のものに触れ、それを自分の課題に取り込む。
- ・コンピューターとはどういうものなのか、何ができるか。(P166)
- ・アイデアと同じくらい、そのアイデアを現実化する行為も重要だ。(P167)

- ・スティーブは、インターフェースのすべてについて、ユーザーが気持ちよく感じられるようにしなければならないと考え、絶対に譲りませんでした。
- ・ジョブズは、フォルクスワーゲンのようなりサ、普通の人が見えるシンプルで安価な製品を作りたいと考えていた。(P171)

第9章<株式公開>

- ・緻密にデザインされ、構築された製品が大好き。
- ・サプライヤーとは容赦ない交渉をするが、「すごい製品を作る」という情熱より利益を優先させることはない。(P176)
- ・仕事を始めた後も生活はかなり質素だった。人生においてお金につぶされないようにしようと心に決めた。(P177)

第10章<マック誕生>

- ・製品に対して十分に熱い想いを抱いていれば現実をも曲げられるとジョブズは信じていた。(P182)
- ・このデバイスが世界を変えるんだ。そういうマシンを作るんだ。
- ・プラスチックの成形からそれが完璧な角度で組み合わせられること、そこにどれほど美しいボードを組み込むのか。
- ・全体がきちんとできあがること、それがスミからスミまでよくよく考えられたものであることを彼は示そうとしたのです。思わずわーという声が出ましたよ。あれほどの情熱にはなかなかお目にかかれませんか。だから私は、アップルへの入社を決めたのです。(P190)
- ・コンピューターは自転車のようなものだ。自転車を発明した結果、人はコンドルよりも効率よく移動できるようになった。同じようにコンピューターを作れば、精神活動の効率を何倍にも高められる。(P191)

第11章<現実歪曲フィールド>

- ・カリスマ的な物言い、不屈の意志、目的のためならどのような事実でもねじ曲げる熱意が複雑に絡み合ったもの、それが、現実歪曲フィールドです。
- ・何が真実なのかを考えることなく断言してしまう。他人に対してだけでなく自分に対しても、現実の認識を強烈に拒むのだ。(P194)
- ・論理的にありえない未来を見ているとき、彼は現実歪曲の力を発揮するんだ。
- ・自己実現型の歪曲で、不可能と認識しないから、不可能を可能にしてしまうのです。(P195)
- ・「精神、ここに自らの意志を形作り、かつて世界に敗れた者が今度は世界を征服する」(P196)
- ・画期的な製品を作ろうという情熱と、不可能に見えることでもやり遂げられるという信念。
- ・すぐれた人材を集めれば甘い話をする必要はない。そういうものだ。そういう人は、すごいことをしてくれると期待を掛ければすごいことをしてくれるんだ。(P203)

第 12 章<デザイン>

- ・アスペンでジョブズは、バウハウスの流れをくむすっきりと機能的なデザイン哲学に触れたのだ。(P205)
- ・アップルはすっきりしたシンプルな製品にする。
- ・近代美術館に収められてもおかしくない品質を目指します。会社の経営、製品の設計、広告とすべてをシンプルにするのです。
- ・洗練を突き詰めると簡潔になる。
- ・デザインをシンプルにする根本は、製品を直感的に使いやすくすることだ。
- ・デザインの主眼に据えているのは「直感的にものごとがわかるようにする」です。(P206)
- ・コンピューターがテレビのように不細工なのはなぜ。もっと薄くしたらいいんじゃないの。真っ平らなノートみたいにしたら。
- ・工業デザインの世界にはわくわくすることが少なすぎる。(P207)
- ・仏教、特に日本の禅宗は素晴らしく美的だ。なかでも、京都にあるたくさんの庭園が素晴らしい。その文化が醸し出すものに深く心を動かされる。これは禅宗から来るものだ。(P208)

<コメント>

アップルの創業者、スティーブ・ジョブズの創業期の言葉は、iPhone,iPad の基本となるものばかりだ。アップルは世界を変えたのだから、その誕生物語として、ジョブズの伝記は詳細に読み込むべきと確信する。ぜひ、ご一読を。日本に一番足らない取り組みがたくさんあり、示唆に富む。

— 2017年7月16日(日)23時43分林明夫—